プリンセスの秘密

種原美穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
プリンセスの秘密

【Ｎコード】
Ｎ６４８４Ｄ

【作者名】
種原美穂

【あらすじ】
次期国王候補の第２王女を守ってくれるのは女性の王家公認騎士！？普通なら、異性に守ってほしいのにその願いは届かないのか？

王女と女性騎士～始まり～

この国を治める『王家』には誰だって逆らうことができない。それがこの国の掟であり、誰もがこの掟を守っていた。
大抵の王道系物語には王子または王女には「騎士」という王子または王女を守る人が存在していた。
その２人は仲良くて、騎士はとても強い。騎士が強くなくては誰も守ることなんてできないだろう。
そして２人は異性であり、２人は結ばれる。
この物語も、それに少しだけ近い物語。

『王家』の第２王女・星川優奈が４歳の頃、初めて優奈のもとに騎士はやってきた。
「これからはずっと優奈と一緒に暮らしてもらう。永遠と優奈が生ある限り」
優奈の父・『王家』の現国王は優奈の初めての騎士をそう教えた。
「彼女は王家公認騎士『聖守』の家系の１人・車本ほのかだ。さぁ、ほのか。これからは優奈をよろしく頼むぞ」
「……はい」
王家公認騎士とは、その名の通り王家が公式に認めた騎士のことだ。
王家公認騎士には、指名された王家の人を生涯守り続けなければいけない。そして生涯を共に過ごすので同姓でなければいけない。
「大丈夫だ、女の子でもこの子は優奈より何倍も強いはずだ」
「はい、わかっています」
４歳の優奈にだってわかっていることだ。
「よろしくお願いします、騎士さん」
「なんでも頼ってください」

それにしても女の子、というイメージがない騎士だ。声も普通の女の子に比べて少し低いし、６歳だって聞いたが普通の女の子よりも少しだけ大きい。けれど髪の毛はセミロングだ。それだけで女の子らしいし、他人の個性をそう思ってはいけないことだ。
そして優奈は騎士と共に過ごしていくことになった。

優奈の守られてばかりの人生に転機がやってきたのは、優奈が１７歳になった頃だった。
このとき、優奈の騎士の車本ほのかは１９歳になる。顔立ちもだいぶ大人びていて、可愛いというより、かっこいいというイメージが似合うようになっていた。
同性に守られている優奈は少しだけ物語に出てくるお姫様を羨ましく思った。
お姫様を守る騎士は異性ばかりで、大抵は結ばれる運命だから。
だけど優奈を守ってくれる騎士は女の子。同性が結ばれるなんてありえないことだ。
宮廷にこもってばかりでは、恋なんてできない。優奈の未来はどうなってしまうのだろう。
「どうかしましたか？憂鬱な顔をしていらっしゃいますけど？」
「ううん、何でもないよ」
「最近、セピアリアとの関係がごたごたですね。戦争に発展しなければいいんですが……」
隣国・セピアリア。最近、関係が良くない方向へ向かっている。
「はい、どうかしましたか？」
ほのかが常に所持する無線機で応答があったようだ。
「……え？わ、わかりました。すぐに避難させます」
ほのかの表情が深刻になった。
「どうかしたの？」
「はい。やはりセピアリアの兵隊が我が国を侵略してきました。

戦争に発展するのも時間の問題です。早く安全な場所に避難しましょう」
「せ、戦争……！！」
優奈の人生で初めて経験することだった。
これから良くないことが起きる。
「準備はいいですか？では行きましょう」
優奈はほのかの跡をついていく。
「大丈夫です。必ず守り通しますから」
そう言う言葉は異性の騎士に言ってほしい言葉だった。
そんなワガママなんて叶うことがないんだ、と心の中で思い、優奈は避難した。

拉致（前書き）

～ここまでのあらすじ～

次期国王候補の第２王女・優奈を守るのは同性の王家公認騎士の車本ほのかだった。異性にまもってもらいが、そんな願いはかなわないまま、隣国と戦争が始まろうとしていた。

拉致

次期国王候補・王家の第2王女・星川優奈は、王家公認騎士・車谷ほのかの引率のもと、避難していた。
戦争が始まろうとしている。
いや、もう始まっているのかもしれない。優奈の知らないところでもう戦争は始まっているのかもしれない。
「こちらです、ここまでこれば安全です」
宮廷内の兵士が誘導する。言うがままに優奈とほのかは入って行く。
中は薄暗い部屋だった。しかし、机や椅子、ベットやバスルームまである。
「ここでしばらく待機していれば命の保証はできるでしょう」
ずっと走ってきたため、日々運動しない優奈にとって体力がかなり消耗した。
「ここで休憩していればいいと思います」
「ありがとう」
優奈の付近に兵士がやっていた。
「お疲れさまです、第2王女様。なんですから命令してくださいな」
優奈は疑問に思った。
「あなた、新入り？」
「はい、そうです。兵士試験に合格し、ここまでやっていきたでありますし」
かなり怪しい。優奈は怪しいものを見つめるような目で、兵士を見た。
「本当に？」
「ちょっ、失礼ですよ」
ほのかが注意する。

瞬間、優奈の口に手が当たる。やたらと強く当てられ、呼吸困難に陥る。
「な、お前……！！」
どうやら兵士が優奈を捕まえたようだ。
「馬鹿ですね、そんな無防備に大事な人を放していいんですか？」
兵士の口調が変わった。
「誰ですか、あなたは！！」
「僕は隣国の兵士。国王の命令でね、敵国の王家を人を拉致してこい、て命令でね。僕はこうして侵入して、実行しているわけだ」
「離すんだ、今すぐに！」
「そんな簡単に離しません。それはあたりまえでしょう？ていうことで、王女様が欲しければ僕を追ってくるんだね、じゃ、アディオス」
「おい、待て！！」
隣国の兵士は優奈を捕まえたまま、その場から一瞬で消えた。
中にはほのか1人しかいなかった。
「……くそっ！こんな緊急事態に……！！」
ほのかはすぐに部屋を飛び出し、優奈を救助しに、隣国に向かった。

偽りの婚約（前書き）

～ここまでのあらすじ～

次期国王候補の第２王女・優奈を守るのは同性の王家公認騎士の車本ほのかだった。隣国と戦争中、ほのかと共に避難していた優奈は隣国の兵士に拉致されてしまう。優奈を守ることができなかったほのかは、優奈を助けにいった。

偽りの婚約

優奈が目を覚ました時、眼前に1人、兵士がいた。優奈を拉致したあの兵士だ。

「んん……ん？」

上手に話すことができない。どうやら口にガムテープが貼ってあるようだ。それでは優奈も話すことはできるわけがない。

ガムテープを取ろうとしても、手足にロープで固定してあって身動きすらできない状態になっていた。

「ん、んんん！！」

兵士に話しかけてみる。「ん」としか言っていないが。

「お目覚めですか。この敵国王女が」

兵士は優奈に気づいた。

「ここは僕の国の王宮の地下の牢獄ですよ」

見渡せば、優奈は牢獄のある部屋に閉じ込められているようだ。

「ん、んんんんっ！！」

優奈は手足を兵士にほどいてもらうように強調した。

「解いてほしいんですか？いいですよ、て言うほど簡単に許すわけないでしょうが。敵に逃げてもらうなんて、よっぽどの物好きしかやるわけがないことぐらい、しっているでしょう？もしかしてそれぐらいもわからなかった？王女のクセに、馬鹿だね」

色々とキッパリ言われ、優奈は怒りを覚えた。

優奈だって、考えている。しかし、例え無意味なことでも、やってみる権利と可能性はある。

「んんんんっ！！」

「うるさい王女ですね」

兵士は優奈のもとへやってきて、ガムテープを外そうとした。

「ぷはっ！ちょっとっ！ここから出してください！」

ガムテープを外されて、優奈は大声で用件を伝えた。

「それはさすがに無理。どうやらね、今回の戦争の原因はあんたが原因なんだってさ」
「あんた……てわたしのこと？」
「僕の国の王子が敵国のくせに、あんたのことが好きなんだってさ。おまけに、僕の国の国王は親馬鹿で、あんただけのために戦争なんてしやがったんだ」
「王子が……わたしを？」
「でも、僕はこの国が嫌いさ。都会で、うるさくて、何もできはしない。望みは叶わない。だから、僕はあんたを奪いにきた。王子にも渡しはしない。誰にも渡すもんか。しかも、結構僕の好みだし」
「……それは冗談のつもり？」
「いや、本気。ということで、僕と結婚しよう。今すぐに。別に式場なんていらない。ここで挙げればいい」
「ちょ……っ！変なこといきなり言わないで……っ！て、何するんですか！」
そう言うと、兵士は興奮したらしく、優奈の顔をまじまじと見つめてきた。
顔を兵士の指で固定される。兵士の唇が、優奈の唇へ接近する。
「何してるんですか！」
固定されていて、何も動くことはできない。
「何って、僕らの誓いのキスじゃないか」
「……誰もあなたと結婚するなんて言っていませんけど」
「いいの、いいの。僕が言うんだから、この婚約は成立するのさ」
言っていることも、やっていることも、この兵士は全てがおかしかった。
こんな時、普通ならほのかが助けてくれる。なのに、今は優奈１人。王女は、強くなんてない。何もできない。
こういうとき、異性の騎士が現れて。兵士を倒してくれたら……。けれど、それはとても叶わない出来事だった。
夢見ている。けれど、叶うことなんてない。

涙が出てきた。
溢れてきた。
嫌だ。心の中で、誰かが助けてくれることを信じて……。
「ほのかぁぁぁぁぁ！！！」
瞬間、背後で何かが倒れる音がした。

平和の犠牲（前書き）

～ここまでのあらすじ～

次期国王候補の第２王女・優奈を守るのは同性の車本ほのかだった。隣国の兵士に拉致された優奈は、兵士からプロポーズを受ける。そしてキスされようとした瞬間、後方で何かが倒れる音がした。

平和の犠牲

「……何者だ！」
「来ちゃ駄目ですか。王女様を助けるのが役目ですから」
そう言って、優奈の眼前に現れたのは1人の騎士だった。
「……ほのかっ！！」
優奈の王家公認騎士・車本ほのかだ。
「大丈夫ですか、すぐに助けます！！」
ほのかは部屋の中に入ってくる。間近まで迫っていたあの兵士の顔はもはや遠いところだ。優奈は涙を浮かべ、ほのかのもとへ走って行く。
「ぐへっ！！」
兵士はあっという間に倒され、その場に倒れた。
優奈はほのかのもとへ走って行く。ほのかのもとへたどり着くと、優奈はほのかを抱きしめる。
「……怖かった……」
「もう大丈夫です。帰りましょう。見つからないうちに」
ほのかが囁くその言葉は、今の優奈にとって、異性の騎士を連想させた。

上空はもはや煙で満たされていた。戦争は始まってしまった。原因は優奈と結婚したい、敵国の王子のために。
そんな勝手なことを。そんなことで関係のない人まで巻き込んで。
「こちらです、もうすぐです」
ほのかの引率のもと、優奈は自分の国へ帰ろうとしていた。
優奈は、深く悲しんだ。この戦争の原因は優奈自身なのだから。
優奈さえいなければ、こんなことにはならなかった。
優奈さえいなければ、戦争は終わる？関係のない人までを巻き込まなくて済む？

「……ほのか、わたしがいなければこんなことにはならなかったんだよね。だったら、わたしはみんなのことを思って、いないほうがいいのかな。ここに」
ほのかはその言葉を聞き、優奈を見つめた。
「確かに、この戦争は王女様が原因かもしれません。しかし、多視点から見れば、相手の王子様も原因の1つなんです。だから、王女様は1人で自分を責めないでください。そのほうが、国民の皆様にも迷惑をかけることになると、そう思います」
「わたしは……生きていて、いいのか……わからない。この戦争が……わたしのせいなら、わたしは……っ！！」
「自分を責めるのはやめてください、王女様」
ほのかはいつだって冷静だった。いつだって態度を変えないんだ。
そして優奈は決意した。
「ほのか。わたしの言うこと、聞いてくれない？あなたにしか頼めないから、頼むの。お願い、今すぐに戦争が長引かないうちに、わたしを……消してしまって。この身体を、あなたの所持する剣で……刺し貫いて」
「何を……言うんですかっ！！王女様がこの戦争の全ての原因ではないんですよ？なのに……全てを王女様のせいにして、責めないでください。そんなことは例え王女様の命令だろうと、できません」
「だめ。今すぐに……やってよ。お願いだから……わたしの覚悟が決まっているうちに、わたしを殺してよぉっっ！！」
王家の命令は絶対権を持つ。従えなければ、処刑。最悪は死刑。
「早く、この剣で……！！」
涙をためながら、優奈は叫ぶ。ほのかが持つ剣を差しながら。
「……わかりました、王女様がそこまで言うのなら、反対はしません」
ほのかは言い、剣を優奈のもとへ向けた。
さようなら。
そう思っていたけど、ほのかの瞳から涙があふれていた。

覚悟（前書き）

～ここまでのあらすじ～

次期国王候補の第２王女・優奈を守るのは同性の車本ほのかだった。そんな中で戦争は始まり、戦争の原因は優奈のことを好きな敵国の王子とその国王の親馬鹿で始まったものだった。優奈さえいなければいいと考え、優奈を殺すようにほのかは頼まれる。もちろん断るが、それでも優奈の命令は逆らえない。覚悟の上で、ほのかは剣を抜いた。

覚悟

戦争で、全ての原因は優奈だと確信した。覚悟しているから、優奈は早く実行したかった。

全ては優奈のせいではないと、ほのかは言った。けれど優奈がいなければ、戦争は終わる。そう言えるのも、現実だった。

ほのかは剣を抜き、優奈の身体へ刃を向けた。

「……っっ！！」

早く……早く、戦争を長引かせないためにも。そのためなら、この身なんて、別にいらない。

もとから、王女様なんて立場、優奈にはいらなかったというのに。

この覚悟は、国民のことを思っての覚悟だ。王家は、国民を守らなければいけない。それは掟で、絶対に守らなければいけないことだ。

地面を見て俯くほのかは、涙を流していた。それはそうだろう。守るべき人を、己の手で殺せ、と命令されているのだから。

できるわけがない。しかし、やらなければいけない。

そしてほのかも覚悟し、剣を優奈へ向けた。

剣が、刃が優奈のもとへ……。

優奈は視界を閉ざした。思いっきり閉ざし、恐怖を少しでも和らげるためだった。

優奈だって、この世界から消えてしまうのは怖かった。消えてしまったら、どうなってしまうのだろう、と考えるだけで、震えていた。

「早く……、わたしを」

瞬間、剣が転がる音が聞こえた。カラカラーン……と響いていく。

「ちょ……っ！ほのか、なにして」

視界を広げたと同時に、優奈はきつく抱きしめられた。ほのかにきつく抱きしめられていた。

「……やっぱり、王女様は欠けることのできない人です。王女様が国民のために消えてしまっては、それこそ国民が悲しむと思うんです。だから……ボクは……目の前で、大切な人を亡くしたくはないんです。お願いですから、もう2度とそんなことは言わないでください。ほかの王家の皆様も悲しむことだと思います。悲惨なことが起きているこの現実で、王女様が亡くなるのは……」

耳元でほのかが叫んだ。その声は叫んでいたのに、震えていた。

「ボクに、王女様は必要です。自分の命にかえても、守り通さなければいけない人なんです。だから、殺すことは……できないんですっっ！！」

「……ほのか」

たしかに、優奈がこの世からいなくなってしまったら、どれだけの人が悲しむのだろう。嘆き、悲しむ国民と王家の人々を想像するだけで、優奈の心は痛かった。

「王女様は何も悪くはないんです。だから、責めないでください。そして、共に生きていきましょう」

ほのかのその言葉が何よりも強かった。優奈の心を支えてくれた。

「わたしは……みんなを、悲しませたくなんてない。だから、わたしは強くなりたい。こんなことで落ち込んでいる場合じゃないのに、わたしは弱くて、何もできない。だから、力が欲しい」

「さあ、行きましょう」

ほのかに腕を差し伸べられた。その腕は光への道なんだと思った。

そして再び、共に歩き続ける。

悪魔の手とささやき（前書き）

～ここまでのあらすじ～

次期国王候補の第２王女・優奈を守るのは、同性の騎士・車本ほのかだった。

戦争の原因が優奈だと知り、自ら消えたいと願った。ほのかに殺してもらうよう頼むが、ほのかは剣を貫かず、抱きしめ、全ての原因は優奈じゃない、責めないでください、と告げる。その言葉を優奈は支えにして、国へ戻る。

悪魔の手とささやき

敵国の中を歩き続ける優奈とほのかを、人々は振り向く。そして、ひそひそとお互いにささやき合っている。
その内容の大体は、優奈にでも把握できた。
戦争の根本。王子が好きな相手。大抵、こんな感じだろう。
ささやかれても歩き続ける優奈たちの眼前に、１人の男の子が現れた。背が低く、幼い感じだ。
そして男の子は優奈たちをキッとした感じで、睨みつけた。
「……ここから消えろっ！！」
幼い面影とは全然想像もできない言葉が、男の子から出た。
よっぽど優奈のことが嫌いなのだろうか。
周囲の人から注目を浴びた。周囲からも「消えろ」「失せろ」などの言葉が飛び交い、騒ぎ始めた。
こんなことでくじけてはダメ。そう優奈は自分に言い聞かせ、何事もなかったかのように進んでいく。
自分の国へ戻れば、きっと楽になれる。その言葉だけを支えにして、道を進んでいく。
瞬間、後方に何者かの気配を感じ、ほのかは地面に転がっている小石を何者かにぶつけた。ほのかの気配の察知と、小石の攻撃は命中した。木の影から中年ぐらいの男が倒れていく。と同時に、男のほうから矢が放たれた。優奈をめがけて。
当然の如くほのかは優奈を守り、ほのかは胸に矢が刺さる。
「……ほのかぁっ！！」
ほのかの名を叫ぶが、ほのかから返事はやってこない。
「ほのかっ！！返事してよぉっっ！！！」
「……」
無言のままだった。
「……ほのか？」

ゆすっても、名を呼んでも、ほのかは何もしなかった。
「……早く、助けなくちゃ」
優奈は傷を負ったほのかを引きずりながら、再び歩き出した。

「……はぁ」
歩きつづけて1時間。やっと優奈の国へ戻ってくることができた。
優奈はすぐに宮廷に入り、救助隊を呼んだ。2分後に救助隊は到着し、ほのかはそのまま病院へ運ばれていった。
とりあえずこれでほのかは大丈夫だろう。優奈は国王のもとへ進んでいく。
「お父様……。優奈です」
そう告げ、中に入る。
「おぉ、優奈。敵国に拉致されたんだってな。よかった、無事に戻ってきて。それで、いったい何があった？」
「戦争が始まった頃、ほのかと共に避難していたところに、兵士に拉致されました。そして部屋に閉じ込められました。それから、偽装の兵士はやってきて、偽りの婚約を受けました。そこでわたしは知りました。この戦争の原因は」
「そうだ。お前と敵国の王子だ」
「はい。わかっています。そして、ほのかが助けに来てくれ、このままここに戻ってきました。途中で、ほのかは傷を負いましたが、救助隊と共に病院に運ばれていったので、心配はないと思います」
「そうだったのか。それで、頼みたいことがある」
優奈に頼みごと。いったい何なのだろうか？
「何でしょうか？」
「敵国の王子の婚約、承諾してくれないか」
……。
沈黙が続いた。
「この戦争は優奈のことが好きな敵国王子が原因だ。つまりは、

優奈が敵国王子と婚約してしまえば、この戦争は終わったも同じなのだ」
国王の言う言葉は、正しかった。
「そうすれば戦争は終わり、国民も国も再び平和に戻る。そういうことを考えて、この婚約、承諾してくれないか」
「承諾ですか……」
国民の平和のためなら。そう思い、優奈は決意した。
「わかりました。その婚約の承諾をします」
「おお、ありがたい」
そして優奈は敵国王子の婚約を承諾した。

傷を受けて、病院で治療を受けたほのかは宮廷に帰ろうとしていた。
「あら、第2王女の王家公認騎士さんではありませんか」
そう言うのは、病院内の看護師だった。
「そう言えば、第2王女様が敵国の王子様の婚約を承諾したんですって。これも今長引く戦争の終止と、国民の平和のための結婚なんですって。さすがです、優奈様。さすが尊敬します。非常におめでたいことです」
……え？
ほのかの思考は中断した。
優奈が、結婚？
敵国王子と？
「その言葉は……本当なんですか？」
「ええ。ついさっき、ニュースでやっていましたもの」
愕然とした。
ほのかはすぐに病院を抜け出し、宮廷のほうへ向かった。

驚愕の結婚式～はじまり～（前書き）

～ここまでのあらすじ～
次期国王候補の第2王女・優奈を守るのは、同性の王家公認騎士の車本ほのかだった。
戦争の原因が優奈のことが好きな敵国王子とその国王のせいだと発覚し、優奈は国王に「敵国王子の婚約の承諾してくれ」と言われる。国民のため、平和のため。そのことを考え、優奈は承諾をすることにした。
一方、優奈をかばい、怪我を負ったほのかは病院から宮廷に戻る途中、優奈が敵国王子とも婚約を承諾したことを聞く。ほのかの思考は止まった。そして、優奈に婚約の確認をするため、宮廷に向かう。

驚愕の結婚式～はじまり～

優奈が結婚？敵国王子と？
ほのかはそんなことが許せなかった。
だってほのかは……。

「王女様っ！！」
宮廷に到着し、すぐに優奈の部屋へと向かった。
「あ、ほのか。怪我は大丈夫？」
優奈はほのかに笑ってみせた。
「あの……敵国の王子様とご結婚なさるって……本当ですか？」
息を切らしながら、婚約の確認をする。
「うん、そうだよ」
ほのかは衝撃を受けた。
本当のことだった。優奈が結婚してしまう。優奈が……ほのかから離れてしまう。
「どうして……婚約を決めたんですか？」
「さっきお父様に言われたんだ。わたしが王子との婚約を承諾してしまえば、この戦争は終わる。だったら、わたしはその王子との婚約を承諾するしかない、て思うんだ。みんなを守りたいし。ほのかだってそう思ってくれるよね？」
ほのかの思考は……まだ止まったままだった。
頭が真っ白になる。
「……王女様は」
「どうしたの？ほのか……？」
「王女様は……」
言うのを恐れて、言葉は震えて。
だけど、伝えたい。

「ボクは……その婚約を認めたくはありません」
優奈の表情が凍りついた。
それは当たり前だった。
まるで、戦争は続いていたほうがいい、戦争を止めるな、と言っていると同じような意味だからだ。
「王女様は、その相手が好きなんですか？」
「別に……好きっていう感情はないよ。見たこともないし。でも、この婚約は、好意をもってするものじゃなくて、戦争を終わらせるための婚約なんだよ。なのに、ほのかはどうして認めないの？戦争は続いていたほうがいいの？」
優奈の言葉に、喉を詰まらせた。
違う。戦争なんて早く終わってしまえばいい。ほのかだって、その意見には賛成する。
……だけど。
「ただ……ボクは」
言いかけていたところで、突然、爆発音が響いた。
「……っ！？」
宮廷の外から爆発したようだ。ほのかは警戒をし、周囲を見回す。
今度こそ、ほのかは優奈を守り通さなければいけなかった。前みたいなことを、2度と起こすわけにはいかなかった。
「王女様、避難しましょう」
ほのかが部屋を出ようとした時だった。
『先程、起こりました爆発は、戦争中の敵国兵士が爆発させた、と明らかになりました。宮廷内で避難している王家の皆様は、すぐに各自の部屋へ戻り、待機をしていてください』
放送が流れた。
とりあえずほのかは、落ち着いた。

爆発した次の日。

いつものようにほのかは起床し、優奈を起こそうとした。
……が。
「王女様っ！？」
ベッドには優奈のすがたがなかった。
「……どうして？」
状況が理解できなかった。
優奈は、再び拉致されてしまった？それとも……。
ほのかはすぐに部屋を飛び出し、宮廷内を走った。
宮廷内の廊下につけられているテレビが視界に入る。テレビからは盛大な拍手と、歓声。そして画面に映っていたのは。
「……王女様？」
花嫁姿の優奈だった。
「きゃぁーっ！優奈様の花嫁姿っ！！もう結婚式は行われているのねっ！これでワタクシたちの生活は再び、平和に戻るのね」
廊下をすれ違うメイドたちも、テレビの結婚式同様、歓声を上げていた。
ほのかは、決して喜べなかった。
「……なんで、王女様は」
ほのかはテレビの画面に映る優奈に向かって、叫んだ。
「これじゃあ、ボクが王女様の騎士になった理由がないじゃないですかぁっ！！」
けれど、優奈は答えない。
唇をかみしめ、ほのかは会場へ全速力で走った。

驚愕の結婚式～おわり～（前書き）

～ここまでのあらすじ～
次期国王候補の第２王女・優奈を守るのは、同性の王家公認騎士・ほのかだった。
隣国・セピアリアとの戦争を終わらせるため、優奈は敵国王子との婚約を承諾する。
そのことを確認したほのかは婚約を否定した。
しかし、次の日、優奈がほのかのもとからいなくなっていた。もう結婚式は始まってしまったのだ。
「プリンセスの秘密」ラストエピソード！

驚愕の結婚式～おわり～

眼前にはたくさんの歓声と、人々の笑顔。
優奈にとって人生で初めての結婚式がもうすぐ始まろうとしていた。
向こう側には衣装を替えた隣国王子のすがた。
そして、花嫁姿に衣装を替えた優奈。
進行方向に進み、２人は隣に並び、歩き始める。
そして歩く2人に向かって、歓声は飛び交う。花びらはひらひらと舞っている。
まさに、誰もが願っていた結婚式。誰も否定しない、戦争終止のための婚約。
誰もが喜ばしかった。
しかし、優奈はふと、1人の女の子を思い出していた。優奈の婚約を見事に否定した優奈の騎士・ほのかだ。
こうやって結婚式が始まっていても、優奈はぼーとほのかのことを考えていた。手に持つ花束が落ちそうになったがすぐに我に返り、そのまま王子と歩き続ける。同じ歩調で。
優奈だってこんな感じで結婚してしまうとは思っていなかった。本命ではない人と結婚するなんて。でも国民のことを考えると、どうしてもしなければいけないのだ。
優奈にしかできないことだから。そのことならば、優奈にだって我慢するしかない。
本当は躊躇っている。
大抵の王道系物語では、ここで異性の騎士が登場し、結婚式を無理やり中断させようとする大乱闘が入ってくるものだが、優奈の場合、それはありえない。
優奈を守るのは同性の騎士であり、その騎士は結婚式に現れるはずがない。

そう確信していた。
神父のもとへたどり着き、神父は誓いの言葉を言う。
長々しい言葉を優奈は受け流し、そして最後の言葉。
「生涯、共に歩んでいくことを誓いますか？」
「誓います」
王子はあっさりと誓った。
一方の優奈は……。
やっぱり、言うのに躊躇っていた。
でも、優奈はここまで誓わないなんてできるわけがない。
もう未来は決まっている。
優奈は覚悟した。
「誓いま」
その時、何かが優奈の言葉を遮った。
眼前に煙が巻き起こっていたのだ。
そして優奈の口には大きな布。
いったい、誰が……？
「王女様。ボクです。ほのかです」
その声の主は優奈が1番よく知っている人物・車本ほのかだった。
「ど、どうして……っ！？」
「今からこの式場から飛び降ります。王女様は僕のあとに続いて、飛び降りてください」
「……なんでこんなことまでして、わたしと王子を結婚させたくないの？」
「好きな人と、結婚したいからじゃないですか」
「……え？」
優奈の頬が真っ赤に染まった。
「早くしてください。煙が消えないうちに飛び降りてきてください」
周囲は騒然となった。
「おいっ、何者だ！このようなことをした奴は、正直に現れよ」

ほのかは何も躊躇うことなく、飛び降りた。
優奈もそのまま飛び降りた。
先にはほのかと、ほのか率いる『聖守』の騎士が布を広げて待っていた。
優奈はそのまま布に受け止められ、式場から逃げ出した。

「どうして……こんなことをするの？ほのかは、わたしのことが好きなの？」
「いや……何、勘違いしているんですか？」
ほのかは一瞬真っ赤に染まり、そして言葉を続けた。
「王女様にはちゃんと、本命のかたと結婚していただきたいんです。例え、それが戦争になろうとも」
「ほのか……」
「それに戦争を止めるには、他の手段もありますし。王女様だけが背負うことはないと思います。だから……」
それからの言葉はぶつぶつとしか聞こえなかった。
「じゃ、帰っちゃおうか」
優奈はほのかに笑ってみせた。
「ボクは……あなたを追ってここまで来たんですよ」
「ん？ほのか、何か言った？」
「いや、何でもないです」
ほのかは優奈にうまく誤魔化し、ほのかは宮廷に戻って行った。

驚愕の結婚式～おわり～（後書き）

引き続き「プリンセスの秘密2」も掲載予定なので、お楽しみください。

あとがき

「プリンセスの秘密」という物語は、意外と簡単に物語の道筋がわかる小説です。
大抵の結末は最初から予想しているので、その間に何をいれていこうかな、ということが大抵は種原の悩みごとなのですが（仮に種原の作品「ＬＡＳＴ・ＷＡＹ～それが生き残るための道～」は毎回のように決まりません……）「プリンセスの秘密」は学校でプロットみたいなものを書いている時に、あっさりと「ここでは優奈をこうしてしまおう」「お、こうすればいいじゃん」とかあっさりと物語が決まってくるんですよね。何故でしょうか？種原にもわかりません。
ちなみに「プリンセスの秘密」が生まれたのは角川スニーカー文庫「螺旋のプリンセス」から生まれたもので、「王女と騎士」の関係はここから考えました。しかし、「螺旋プリン」のほうは当然の如く、騎士が異性なので、「ここを同性にしてしまえば面白い」とここで、ほのかがうまれたわけです。
そして結婚式は「ＦＦ１０」を参考にしました。あれですよ。ユウナと（あれ？変換したら優奈になっちゃった……）シーモアとの結婚式にティーダたちが乗り込んでくる、という感じにしてみました。そんな感じの雰囲気で読んでいただけると嬉しいです。
ちなみに続編「プリンセスの秘密２」（近日連載開始予定）では、ほのかがなんで優奈の騎士になったのか、とかいろんな事実が明かされる予定です。
ちなみにテーマは「次期国王候補の争い」です。実は「プリンセスの秘密」に出た「王家」の人は優奈と現国王（優奈の父）だけなんですよ。その「王家」が続々と出る予定です。じゃないと、「次期国王候補の争い」になりませんからね（笑）。
では、あとがきはここまでにして。

「プリンセスの秘密」を最後まで読了していただきありがとうございました。
評価とか感想とか入れてくださると嬉しいです。参考にしていきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6484d/

プリンセスの秘密

2010年10月10日19時28分発行